

(別刷)

豆本『猿かにはなし』影印と翻刻

裕村 裕子

児童学研究

—聖徳大学児童学研究所紀要—

第26号 別刷

2024年2月

豆本『猿かにはなし』影印と翻刻

楡村 裕子

A Study of the miniature book, *Sarukani hanashi*, published during the Edo –
Meiji periods.

MATSUMURA, Yuko

要旨

江戸時代後期から明治時代にかけて出版された子ども向け豆本類は、日本の出版史を知るうえで、子ども向け絵本の歴史を知るうえで、昔話の再話史を知るうえでも重要だと考えられる。しかし廉価な豆本は消費され捨てられてしまったり、個人蔵のまま埋もれてしまったりすることが少なくない。本稿では、豆本『猿かにはなし』(五雲亭貞秀、山口板)の影印と翻刻をおこない、その特徴について検討をおこなった。

『猿かにはなし』は、猿に殺された蟹の仇討ちを友人の蜂と白卵が協力しておこなうという内容で、昔話「猿蟹合戦」に拠っている。あらずじは、当時主流で伝えられていたと考えられる内容に合致するが、会話に芝居の要素が含まれていたり、高さを強調する構図を用いたり、絵と文の工夫により大人読者をも楽しませる読み物としての個性を発揮している。同時に、表紙に子どもを描いたり、子どもの成長を願う「麻の葉」柄を背景にあしらったり、最後にめでたい大黒の絵を加えるといった工夫からは、子どもを意識した絵本づくりもなされていたことも窺われる。

キーワード

絵本, 豆本, 昔話, 猿蟹合戦,

Abstract

Children's picture books "MAMEHON", miniature books, published from the end of the Edo period to the Meiji period. They are considered important for understanding the history of Japanese publishing, the history of picture books for children, and the history of folktale retellings. However, inexpensive miniature books were often discarded or buried in private collections. In this paper, I examine a mamehon named *Sarukani hanashi*.

In *Sarukani hanashi*, a bee, a mortar, and an egg cooperate to avenge the death of a crab killed by a monkey. It based on Japanese folktale, *The battle of a monkey and a crab*. The synopsis of the story is what was mainstream at the time, but the pictures and text reflect elements of both theater and children's culture.

Key words

Picture Books, Miniature Books, Japanese Folktales, The Battle of the Monky and the Crub, Japanese children's literature.

1, はじめに

ミニチュアサイズの書籍である「豆本」は江戸時代から現代にいたるまで、さまざまな時代に制作され愛好されている。このうち江戸時代後期から明治時代にかけて作られていた子ども向け豆本は、江戸から明治にかけての子ども向け書籍の変遷や、出版技術の移り変わり、また昔話を題材とするものが多く出版されていたことから書承の昔話の変遷を知るうえでも重要なものと考えられる。しかしいっぽうで、安価な読み物であった豆本は読み捨てにされたり、個人蔵のままにされたりするとも多く、実態を知ることが難しいのが現状である。

本稿では豆本『猿かにはなし』の影印と翻刻をおこない、絵本の歴史を知るうえでの一助としたい。この書籍は個人蔵の資料であるが、研究のために公開の承認を得たものである。『増補版 国書総目録』『改訂日本小説書目年表』には記載がない。また、『近世子どもの絵本集』(鈴木, 木村 1985)や『幕末・明治豆本集成』(加藤2004)のリストにも記されていない書物である。

2, 書誌

1 巻, 10丁

表紙 「猿かにはなし」「山口板」と記されている。色摺り。

題箋なし。若い女性と男児が目を見かわしている。奥の女性は左手に蟹を持っている。手前の男児は柿の枝を背負い、手に猿の面を持っている。手に持つもので「猿蟹」を表現していると考えられる。背景には、子どもの健やかな成長を願う「麻の葉」文様があしらわれ、読者として子どもを意識していることが窺える。見返しなし。11cm×7.3cm

本文匡郭 9cm×6.4cm

柱刻 「猿」「一～十」

画工 五雲亭貞秀(10丁裏による)

板元 山口板(表紙による)

刊年 未詳

備考：序文は「藤壽亭」による

3, 著者, 画工, 板元

10丁裏に「五雲亭貞秀」の名前があり、画工は五雲亭貞秀こと橋本貞秀(1807頃-1879頃)だとわかる。貞秀は江戸時代後期から明治時代に活躍した浮世絵師で、横浜絵や「一覽図」と呼ばれる精密な鳥瞰図で知られる。歌川国貞に浮世絵を学んだ。天保から嘉永にかけて絵草紙類を描き、ときに文章も自作した。特に武者絵に定評がある。合巻に『音に菊御家の化物』(台湾大学蔵)、豆本に『むかしばなし浦島ぢい』(個人蔵)など。

1丁表の序文に「藤壽亭」と名が記されている。藤壽亭とは、山口屋藤兵衛(生年不明-1835?)のこと。本書の板元「山口屋」の主であり、戯作者でもあった。同号に錦耕堂、のちに春耕堂。山口屋は貞秀の作品として「和漢英雄百一首」、「為朝一代記」他を出している。

山口屋は文政9(1926)年『江戸買物独案内』にも名前が載る地本問屋で、最初は元浜町で店を構え、後に馬喰町2丁目、小伝馬町3丁目に移転した。

4, あらすじ

『猿かにはなし』は、おおよそ以下の内容である。蟹と猿が握り飯と柿の種とを取り換える。蟹の育てた柿が実をつけると、猿が来て実を横取りする。猿は硬い実を蟹に投げつけて殺す。蟹のいまわに居合わせた友達の蜂は、卵と白と共に仇討ちをおこなう相談をする。まず卵が猿の屋敷の炭団に隠れ、帰ってきた猿にやけどを負わせる。やけどの薬を買おうと猿が屋敷を出たところを、道の際に隠れていた蜂と白、追ってきた卵が力を合わせて仇を討つ。

以上のとおり『猿かにはなし』は、猿と蟹の争いから、仇討ちに至る物語で、動物昔話「猿蟹合戦」^{注1}に基づく豆本だと考えられる。なお、伝承の「猿蟹合戦」では、蟹が柿の木に「はやく芽を出せ柿の種、出さねばハサミで挟み

切る」等と声をかける、いわゆる「成木責め」の場面が語られるが、この豆本では成木責めの場面は見られない。近世の「猿蟹合戦」は、蟹が蜂や白の加勢を得て猿に仇討ちをおこなうものと、子蟹が蜂や白を家来に従えて仇討ちをおこなうものに大別できる。本書の内容は、前者の系統である。

仇討ちをおこなう者は、蜂・卵・白である。仇討ちをおこなう登場人物については、沢井(2011)が「幕末から明治にかけて数多く出版された絵本類、あるいは尋常小学校の教科書では、卵・蜂・白が活躍している」^{注2}と指摘している。本書は登場人物について、幕末から明治期に多く流布していた「猿蟹合戦」の書物と同じ特徴を有していると考えられる。

なお同題の豆本に佐野屋喜兵衛版(江戸末期、白百合女子大学所蔵)や小森宗次郎版(明治20年、国立国会図書館蔵)が確認できる。ただし、各々の内容は異なる。

5, 絵画表現

(1)擬人法について

冒頭(1丁裏2丁表)では、猿と蟹が動物の姿で描かれている。それ以降は、猿、蟹、蜂、白、卵とも、頭が動物器物で、体は人間として描かれている。ただし、蟹蜂白卵はそれぞれの頭部が動物器物全体の姿となっているのに対し、猿は猿の頭部のみが人間の体のうえについている。

なお猿の着物の柄が途中で変わっている箇所がある。6丁裏7丁表で猿の着物は格子柄として描かれている。7丁裏8丁表では卍柄に手ぬぐい姿で描かれ、8丁裏9丁表では手拭いがとられ再び格子柄になっている。また7丁裏8丁表で蜂は帷子を着ていないが、8丁裏9丁表では帷子を着ている。このように仇討ちがおこなわれる後半では、登場人物の着物に統一性が欠ける。

(2)登場人物について

「猿蟹合戦」の筋に登場しない人物が2人描かれている。ひとは、2丁裏の男性である。この男性の着物は3丁裏の猿の着物と同じ「卍」柄であり、猿が柿の育ち具合を見に来たとも推測できる。

10丁裏には大黒が描かれている。本文「大黒の槌は打出の小槌でなし 奢る頭をくらはせる槌」^{注3}という一文を受けてのことであろう。江戸期の赤本は、お年玉として子どもに贈られたこともあり、めでたい結末や絵柄で話が終わるものが多く残されている。この豆本の大黒も、子ども読者にめでたい結末を示そうという作り手の意識が反映していると考えて良いのではないだろうか。

(3) 構図, その他

登場人物の立ち姿や配置は, 芝居の一場面を連想させる。7丁裏8丁表と8丁裏9丁表の猿は同じ立ち姿で描かれており, 一種の定型を示していると思われる。

背景を省略して登場人物を強調する頁(9丁裏10丁表)と, 庭や室内を描写している頁とがみられる。4丁裏5丁表で, 柿の木に登る猿の姿は屋根越しに上部から見下ろす構図で表現されており, 高さを強調している。構図や背景の有無で緩急をつくり, 豆本全体をリズムカルに仕上げている。

卵と臼が擬人化されて登場するのは7丁裏8丁表と, 物語が後半に入ってからである。これは仇討ちの相談をする場面が描かれていないためであろう。

6, 影印と翻刻

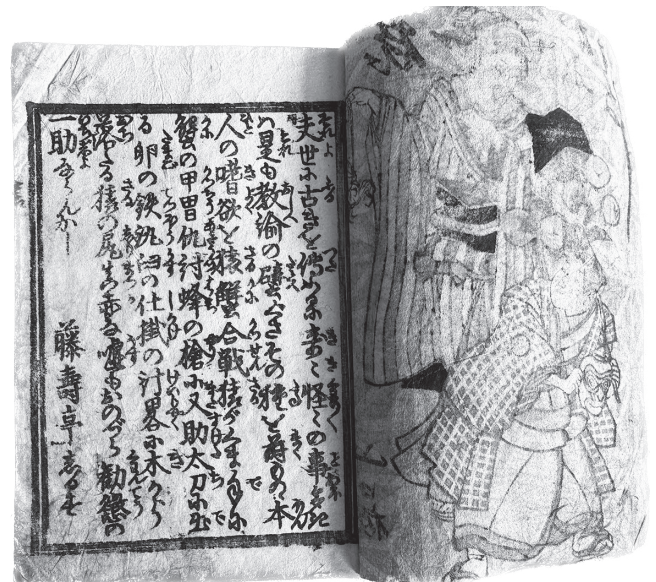
【表紙】



猿かにはなし

山口板

【1丁表】



それよ 夫世に古きを伝ふるに奇々怪々の事多きは是も教諭の譬ぐ
 さ その種を蒔もの、本 人の嗜欲を猿蟹合戦 猿がくま
 手にかに かつちうあたうつはち やり またすけたち で たまご てつほうす
 しかけ けいりやく き おち さる しりまつか うす くわんでう
 仕掛の計略に木から落たる猿の尻真赤な礪もおのづら勸懲
 一助ならんかし 藤壽亭しるす

【1丁裏】【2丁表】



「それ ここから なげてやる うそのたね
ではけつしてないぞよ

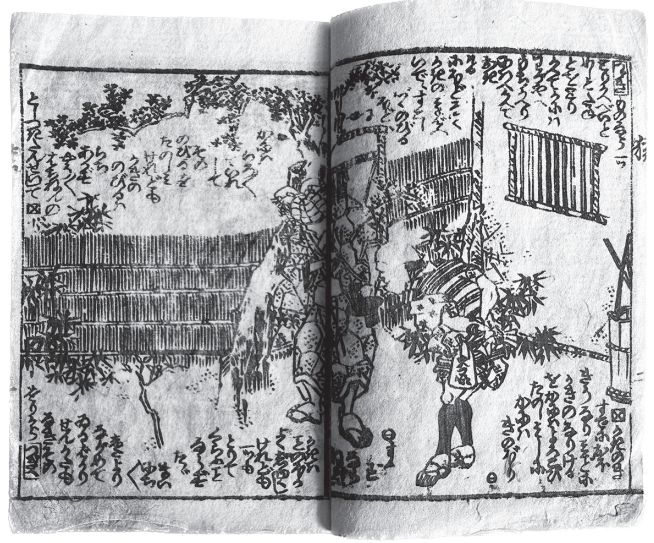
こゝに さるさはのいけのほとりにいと大きなるかにすみ
けり あるときいけのみぎわにいで、 めしをたきてゐた
りしが

やがてにぎりめしをこしらへたり しかるに一ひきのさる
これを見て こりや／＼かによ そのにぎりめしを一ツく
れ そのかはりには

このかきのたねを一ツやる これはからわたりのだいじな
ものじやが てめへが かはいさにくれてやる そのかは
りにはやくめしをよこせ／＼と だませば かににはせうぢ
きもの* そのやうなめづらしい〔つぎへ〕

*せうぢきもの 正直者

【2丁裏】【3丁表】



〔つぎ〕ものなら一ツ とりかへべいと めしとたねとを
とりかへて かにには わがやへもちかへり にはへうへて
おきけるに ほどなくかきのみばへ^いいで、 すこしづゝ
のびるほどに

かににはいろ／＼ていれして そののびるを たのしみけれ
ども かきののびるは らちあかず やう／＼はちねんの
としつきたんせいして

かきのき すでにおほきうなり みことにかきのなりける
を かににはよろこひ たのしみしに かにには きのほり

することならねば かきはことのほかよくじゆくしけれど
も 一ツもとりてくらふをならず ただ まいにち／＼
したよりながめてゐるばかり せんかたもなき** そのを
りから〔つぎへ〕

*みばへ 実生。種からの発芽

**せんかたなし 方法がない。どうしようもない

【3丁裏】【4丁表】



〔つぎ〕いせんのさるはのろ／＼きたり おゝかによ かきがよなつたのといへば かににはさるをみて おゝさこなたのくれたかきのたねがやう／＼このやうになつたれど きにのぼるはふ糸てなおれとることならぬ たかいこずへ〔つぎへ〕

ゝおゝ うまそうふによくなつた もとはおれがやつたたねだから おれもわけまへをたんととるぞよ

ゝてめへのくれたたねなれど八ねんこのかたのおれがたんせいでやう／＼なつたこのかき 一ツニツはやりもせうがたんととるとはさみではさむぞ

【4丁裏】【5丁表】



ゝうぬにだましてたねをやつたも たんせいさしてなつてからはおれがしよしめる*りやうけんだに それを

うか／＼ていれしてとることならぬ のろさくめ うまいのをやつてたまるものか

*しよしめる 取って自分のものにする

〔つぎ〕おぬしにもわけてやるほどに たんととつてはくれまいかといはれて さるはにこ／＼もの おゝがつてんだとかきのきにする／＼とのほりあがり よくじゆくしたをみてゝは むせうにとつてうちくらひ かにへは一ツもあたへねば かにには大きにはらをたて これさるよなんでわれにはくれぬのじや はやくおりよとさけべども さるはそらみみ きかぬふり なほしたゝかに とりくらへは かににはしたにてしだんだふみ しきりにさるのをしれば さるはうるさくまだじゆくさぬかたいしぶかき四ツいつゝ ちからまかせに かにのかうらへばら／＼／＼とうちつくれれば かににはかうらを〔つぎへ〕

ゝああ□□□ はやくよこばひでにげるががちだ

【5丁裏】【6丁表】



〔つぎ〕うちくだかれ あつとさけびて 十げんばかりはしりもあへずたをれけり

さるはいよ／＼したりがほ かきをのこらずくらひつくし日もくれたればきををりて おのがうちへぞかへりけるかゝるところに一ツのはち のつさ／＼ときたりて たをれしかにへつまづきて てうちん*のひに すかしみれば かねてみしりしかになるが ふかでによはりしていなれば はちはおどろきひきおこして やうすをとへば いきも はやたへ／＼なりける くだんのかには わづかにめをあけ はちをみて ありししだいをものがたり むね

んのはがみなしながらよはりて そのまゝしに、けり は
ちはそのこときくよりも【つぎへ】

^きけばきくほど につくいさるめ かたきは おれが
うつてやる こゝろをのこさず ぜうぶつしやれ

^うれしや はちどの いまにはじめぬそなたのしんせつ
なんぶんあとをたのみますぞや

*てうちん 提灯

【6丁裏】【7丁表】



【つぎ】おとこぎのあるものなればともにむねんのはがみ
をなし よし／＼かたきはとつてやるとかにのしがいをそ
こらにうづめ ひとまづそこをたちざりて さるのすみか
をたづぬるに さるはいまだかへらぬやうす はちはしあ
んをさだめつ、かねてともだちのたまごとたちうすこつそ
りよびだし いさいのことつぐれば ふたりもおどろきて
さらばさうせん かうせよと しめしあはしつ はちとう
すは

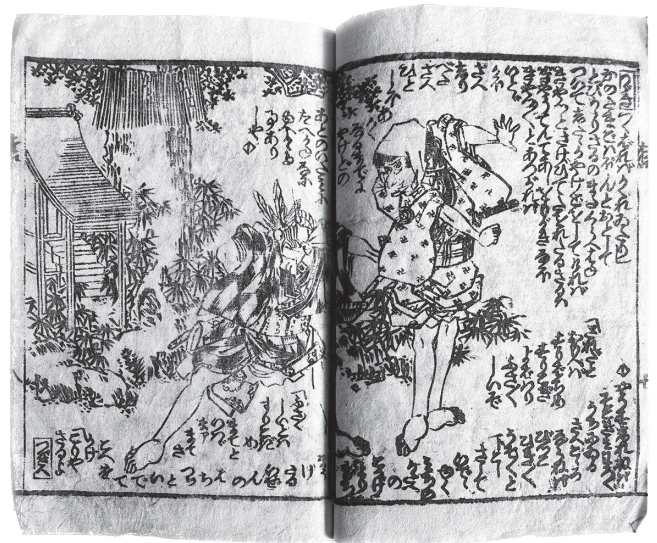
みちのほとりのこかげにしのみ たまごはさるのうちへゆ
きて ひばちのなかへしのみ入り はいをかぶりてまつと
もしらず のろ／＼まいる くだんのさる けふはちか
ごろにないうまいしあはせ しかし かにをころしたこ
と 人がみないでよかつたと つぶやき／＼ うちにいり
まづいつふくやらかさんと いけび*のたどん**かきたて、
そばにうつかり【つぎへ】

アツつ、／＼／＼ だれがこんなぜうだんをしておいた
しらん けちいま／＼しい

*いけび 埋め火

**たどん 炭団

【7丁裏】【8丁表】



【つぎ】つくばれば かくれるたりしかのたまごは ほん
とおとしてとびかゝり さるのまたくらへはねついて し
た、かやけどをしてければ きやつとさけびてたをれたる
さるはぎやうてん てあしをもがき なほ きやつ／＼と
あつがれば いとゞ かほさへ しりべたさへ ひとしほ
あかくなるまでに やけどのあとのいたみにたへかね な
にゆへかゝることありしや

やうすしれねば そときみわろく うちにゐるさへとゝろ
ならねば びつこひき／＼ うそ／＼と
下としさしていので、ゆくみちのかたへのこかけより まち
まうけたる*いぜんのはち つつといでてこへをかけ

^こりや さるよ【つぎへ】

^たれだとおもへばすりばちめ すりこぎ**よばはり ふ
さ／＼しい***ぞ

^ふさ／＼しいとは すりこぎめ まてといはゞ まア
まてさ

*まちまうけたる 準備して待つ。待ち受ける

**すりこぎ 搦粉木。本来はすり鉢でものを搦るときにつ
かう棒のことだが、転じて人をのしるときに用いる

***ふさふ(ぶ)さしい 図太い。厚かましい

【8丁裏】【9丁表】



〔つぎ〕わりや よるよなか どこへいくのだ
 ^おれは ちよつとそこらまで やけどのくすりをかひに
 いくのだ
 ^ぎまをみる うぬがうちへたまごをしのばせ あついめ
 させたもわけあつて こゝまでひきだすはかりごとだは
 ^□□ そりやなんで このおれを
 ^いふな／＼ わりやア けふさるさはのかにをゑらめ
 にはしたな
 ^いんやしらぬ そりや人ちがひだ
 ^ヤアとぼけるな けふさるさわをとふりかゝり のがれ
 ぬなかの かにがしにぎは くわしいわけをきいたゆへ
 かたきをうつてやる やくそく こまごと*いはずと〔つぎ
 へ〕

*こまごと 細事。細言。細々したつまらない事

【9丁裏】【10丁表】



〔つぎ〕かくごをせい

^□□ いや ちよこせへな*かたきよばはり われがは
 りでさそうとも けぶかいおれにたつものか ならばてが
 らにさしてみい
 ^いふにやおよぶと ぶんとこへかけ とびかかるを さ
 るはひとこしぬきはなし きりはらへども ひるまぬはち
 なほぶん／＼とびつくりから あとおつけてきたり
 し たまごかくと見るより さるはびつくり いぜんのや
 けどにこりはてゝ こりやかなはぬと ひつばづし** に
 げんとしたる うしろのかた つつくりたつさる だいで
 ううす***に さるはしたゝかつまづきてころびしうへゝの
 りかゝる うすのおもみにうごけばこそ たゞ
 きやつ／＼となくばかり それみろさるめ よいざまと
 〔つぎへ〕

^大どううすのめかたは しつかり いくらあがいても
 もうかなはぬ たれだとおもふ あゝ つがもねへ****

^ヤア だしぬけのうすつきめ きやつといふめにあはした
 な われにもかきのたねをやるから ゆるしてくれ /＼

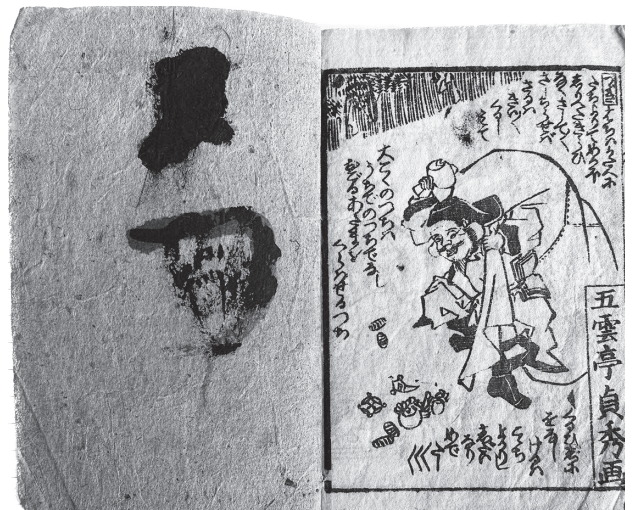
*ちよこせへな 猪口才な。ござかしい

**ひつばづす 引き離す。勢いよく向かってくるものから
 体をかかわす

***だいでどううす 大道白。大きな木製の搗臼。あるいは体
 の大きなことのたとえ

****つがもない 馬鹿らしい。くだらない。市川団十郎が
 荒事で見得をきるときの文句に「誰だと思う。ああ、つが
 もない」というのがあり、その文句を引用していると考え
 られる。「助六由縁江戸桜」を参照

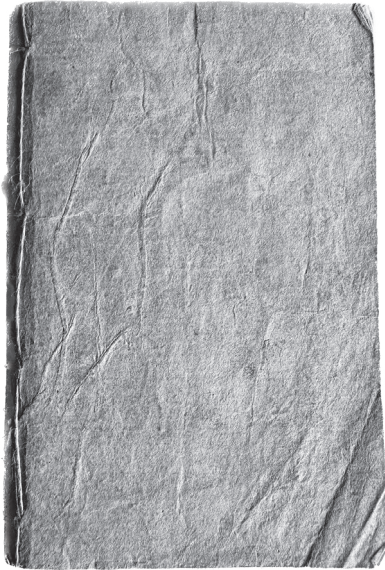
【10丁裏】



[つぎ] はちはかたへにたちよりて めつほしりへたきら
ひなく さして／＼さしちらせば さるは きい／＼くる
しみて くるひじにをなしけるは こゝちよかりししだい
なり めでたし／＼／＼／＼

大こくのつちは うちでのつちでなし おごるあたまをく
らはせるつち

【裏表紙】



7. まとめにかえて

以上、豆本『猿かにはなし』1冊について検討してきた。当時主流であったと考えられる昔話「猿蟹合戦」のあらすじに、舞台の要素を盛り込んだり、高さを強調する構図を工夫したり、あるいは子ども読者を意識した要素を盛り込んだりして、書籍としての個性を発揮している。

今後、この豆本を江戸明治の出版史や文化史のなかで検討した場合、あるいは新たな豆本が見つかった場合に、さらなる発見があると思われる。それぞれの分野から、この豆本についてご教示いただけることを期待したい。

最後になりましたが、貴重な資料を見せて下さった瀬田充子さん(瀬田文庫)にお礼を申し上げます。

注記

注1 関敬吾著、小澤俊夫補訂『日本昔話の型』に基づく「59猿蟹合戦」の話型は、以下のモチーフ構成による。「1、猿(狐・兎)と蟹(雉子)が(a)穂を拾ひ、(b)共同で田を作り餅を搗く。(c)柿の種と握り飯とを交換する。2、(a)猿は蟹の餅(柿)をとらうとして失敗する。(b)猿は柿で蟹を

打つ、または殺す。3、(a)蟹は猿におどされて泣いてゐる。(b)子蟹が親の仇討を計畫してゐる。4、栗(卵、椽)・蜂(針)・糞(味噌)・臼が蟹に同情し、または(b)餅をもらつて仇討を援助する。5、猿の家に行つて、栗は爐に、針は水桶の中に、糞は戸口に、臼は戸口の上にかくれ、仇を討つ。」(P.15)。「猿かにはなし」はこのモチーフにより構成されているため、「猿蟹合戦」に分類される昔話と考えることができる。

注2 P.45

注3 10丁裏による。ただし読みやすさを優先して適宜漢字をあてはめている。正しくは翻刻を参照。

参考文献

- 稲垣進一、『浮世絵入門』。河出書房新社、1990、151p
加藤康子、『幕末・明治豆本集成』。国書刊行会、2004、398p
内ヶ崎有里子、『江戸期昔話絵本の研究と資料』。三弥井書店、1999、552p
原色浮世絵大百科事典編集委員会編、『原色浮世絵大百科事典』。大修館書店、1982、142p
鈴木重三、木村八重子、『近世子どもの絵本集 江戸篇』。岩波書店、1985、519p
鈴木俊幸、『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』。平凡社、2010、262p
関敬吾、小澤俊夫補訂、『日本昔話の型』。小澤昔ばなし研究所、2013、133p
瀬田貞二、『落穂ひろい』上下。福音館書店、1982、412p、414p
叢の会編、『草双紙事典』。東京堂出版、2006、388p
鳥居フミ子編、『台湾大学所蔵近世文芸集』。第五巻、勉誠社、1986、448p
永井道雄他、『日本の子どもの歴史展—17世紀から19世紀の絵入り本を中心に—』。東京都庭園美術館、1986、86p
中野三敏、肥田皓三、『近世子どもの絵本集上方篇』。岩波書店、1985、522p
内ヶ崎有里子、『合巻『昔咄猿蟹合戦』について』。『叢』、30号、2009、PP.244-263
加藤康子、『所見所伝小本型近世子ども絵本目録 その1』。『平成2年度科学研究費による草双紙研究報告書』、1991、PP.572-615
加藤康子、『江戸期の子どもの本—赤本から豆本へ—』。『昔話—研究と資料—』、33号、2005、PP.33-46
沢井耐三、『『猿蟹合戦』の異伝と流布—『猿ヶ嶋敵討』考—』。

『近世文藝』, 93巻, 2011, PP.46-58

杉本史子.「時事と鳥瞰図－幕末, 新たな空間の誕生と五雲

亭貞秀」.『千葉県史研究』, 第16号, 2008, PP.44-63

津田真弓.「天保改革の焼き直し作にみる戯作の変容－善玉

悪玉を端緒に」.『日本文学』, 65巻, 10号, 2016, PP.
20-30

本稿中の画像について無断転載はご遠慮ください。